

ボジョン病院肝胆膵外科 便り

1

江畑智希(平成2年卒)

2006年4月からフランス・クリシー市にありますボジョン病院・肝胆膵外科で研修をしています。今まで平松和洋、前田敦行、野田徳子、山本英夫、安藤英也(敬称略)と偉大な先生方が研修しており、腫瘍外科にはおなじみの部門です。私の場合は昨年12月頃に話が湧き上がり、1月に決定しました。「どこ行きたいの?」と聞かれても海外渡航を想定していなかった私には目的意識などなく、「ベルギーに行ってみたい。」ととりあえず口走ったことは今でも明確に覚えています。なんとなくおいしそうだからという実に安易な発想から出たものですが、当然のように、私の意見は秒殺されしばしの重い沈黙の後、「フランス、ベルのどこやな。」という二村雄次先生の一言。最初から全ては仕組まれルールはひかれていたのでしょう。ここからすべては始まります。

フラ文化・フラ語の無知な私とパリ、実に似あわない組み合わせです。渡航前にしたことは、フラ語教室通い(週2)、研修に対するフランス当局の公文書の作成、VISA取得、ネットでのアパート契約、の4つでした。フランスの歴史を学ぶために、ブックオフで“ベルサイユの薔薇”を全巻購入し読もしました。まだフランスを理解していなかった私は3ヶ月でこれらを行ったため、各方面に軋轢を生じ徐々に憔悴していきました。この頃相談した前田先生からご愁傷様な目線で「フランス好きなの?」という根源的な質問を受けたことが今でも思い出されます。フラ語教師のゴーマンさに激していた私はフランス大嫌いという一方的な先入観を抱きつつ4月2日に渡仏しました。

40歳にしてはじめての西洋圏です。緊張は否めません。楽しそうな団体日本人客に比べ、これからの生活に不安一杯の日本人。顔色不良です。アパートにたどり着けるのかが心配です。日本語でさえアパート賃貸契約書は小難しいものです。全く理解できないフラ語の契約書を交わした後は、特に連絡はなく「アパート前に何時頃来てよ」という簡単な指示をもらっただけです。迎えに来てくれた安藤先生と合流したのはいいのですが、パリ市への電車の中は黒人でごった返し不穏な空気が流れています。その中でかばんを一つパクられました。PCやズボンやめがねやトラベラーズチェックや土産が入っており、パリ北西の移民エリアに消えていったことはとても残念でした。警察に被害証明を2人でもらいに行きましたが、時間外であることや担当署が違うとか難癖をつけてやろうとしない警察官にわめき散らしたら結局やってくれることになりました。ごね得社会の一端が垣間見えると同時に言葉はなかつともなるとかなることを達観する。失意の中ようやく薄暗いアパートでひとりたたずみ、PCという情報を操る小道具を無くしたことでこれほど傷つく自分に驚きつつ、「形あるもの必ず壊れる」という格言?を思い出します。より正確には「必ず壊れるか、盗まれる」だと、時差ぼけとうすいビールでしばれた頭の中で繰り返す。

二村先生のご配慮で4月は前任の安藤先生と重なったため、雑多なしきたりを教えていただきとても感謝しています。朝のカンファのあと寮の果物とコーヒーを失敬し、安藤部屋で一緒にだらけたあの頃が懐かしく思いだされます。初日からジーンズとスニーカーといういでたちで病院に行き(そーいものだといわれていた。事実、来る外人たちでタイをしめてくる人は皆無。)、皆へのあいさつも紹介も何もなく、疲労と不安と緊張と孤独がぐるぐる巡る中ベルゲッティー教授と初対面。すぐに「じゃあ手術室に行こうかー」で始まりました。顔は怖いですが、実に気さくです。2人で行う肝切、それを支える基本手技、各種の膵手術、バイパス手術など私が目にするのなかつた

手術が行われております。特に噂にきくハンギングは想像以上に迅速で驚きです。さすが“元祖”。一方、お弟子さんたちが行くと私のイメージ通りのゆっくりじっくりです。そのコツを盗みたいと思います。日々行われるハンギング法を主軸にした肝腫瘍に対する肝切除は、胆道癌に対する肝切除とは趣が異なり、その差を理解するように努めています。私は肝胆膵外科が専門とというものの実経験ははまだ乏しく、「肝臓外科」は不十分です。欧州トップクラスのボジョン病院でこの点を補強できることは幸せです。

風評どおりに画像には何も期待できず2-3月前のMRIまたはボロイCT、胆管像はないも同然なのでしばしば開腹所見が甚だしく想定外のことがあります。ベルゲッティー先生は必ず表情豊かに悩みつつ「何をするのがいい、ウバター？(よくマエダともいう)」と意見を求め、私は二村流の攻撃的戦略をつい述べてしまい緊張感が生じます。この小競合いは研修医の楽しみのようなので、まあ結局は術前検討がなかったかのように、言い訳とともに術式を軽やかに変更します。この場当たり主義、いや高度なアドリブと正当化するための豊富な知識、が醍醐味でしょうか。腫瘍外科学教室とは全く正反対のことがごく普通に行われている事実に感動と小怒りと多少の憧憬を当初覚えたものですが、今ではなじんでしまいました。外科医は術中所見重視という発想が根底にあるようです。全般にいえることは、他人の手術をしみじみ観察する機会はこしばらくなかったので、彼らを通して自分を振り返るいい機会でもあります。

閉口するのはカンファレンスの多さです。毎朝の入院患者カンファに引き続きICUのカンファで2時間弱/日。加えて月曜日の移植カンファ、火曜日の画像カンファ、木曜日の外科カンファなどが各々1、3、3時間程度。1週間を総計すると15時間はカンファをしていることとなります。腫瘍外科よりはるかに多い。お話好きなフラ人だから苦ではないのでしょうか？イタリア人は嫌いといっています。その内容は、研修医への教育的指導から、論文のこと、単なる雑談までを内包しており、治療方針や術後経過をめぐって大激論が交わされることもしばしばです。苦境にたたされたベルゲッティー先生が机をドンと叩きながら「オレの言うことに従え」で終了するのは、なんとなく名古屋でみかけたような風景でなつかしい感じがします。そういえば、腫瘍外科の症検でも後半になると必ず誰かは寝ています。ここで不思議なのは私以外は居眠りしないのです。業務中の居眠りは日本人特有？ベルゲッティー先生は私が熟睡しているのを確認した上でワザと指名し何か質問をしているようです(外人仲間談)。つつかれて目が覚める頃に「あ、奴は寝てるわ」という声と共に皆が笑い、話題は次に流れていき、また私はまどろむというのがルーチンなカンファ風景。逆に、手術の際には研修医がよく寝ています(これは日仏共通)。

日常診療では“手術には入りたいが術後は診たくない”という外科医の夢を具現化する研修医達(半年交代で5人程いる)により患者はしばしば苦境に追いこまれます。こういう場合にはベルゲッティー先生は激怒し「誰の責任だ？」という言葉で詰問しますが、皆涼しい顔で「知らない。(Je ne sais pas!)」「私のせいじゃない。(C'est pas moi!)」と平気で答え、またそれで流れてしまうボジョンの不思議。責任という言葉がちらつく時に頻用される「ジュヌセパ」と「セパモア」の2大呪文とその変法。その霊験は自己との関係性を一撃で断ち切れること。フランスを理解するうえで極めて重要です。私も都合のいいときだけ勇気をだして愛用します。実践応用例として、「ウバター、

これはおもしろいね。ニューコンセプトってやつ？で、論文にしてくれんかなー」「いやです、ムッシュー。私の仕事ではありません。」……日本人なのに‘ノン’といえる強い心が育っています。

みんな論文をよく読んでいます、もっといえば必死に読んでいます。勉強熱心です。最新の論文はすぐ自分たちの臨床にどう生かされるかを吟味し、改善するのが当然のような感じです。論文が与える影響の大きさを知りました。好きな割には自分で書くことはあまりしないような印象です。私も超遅筆であり榎野先生をいつもいらだたせてますが、一方では、知らないことを恐れ、知らないと正直に言えず、時にはウソをいう(あまり悪気は感じていない様子)側面も観察されます。自分が知らない時は「どう思う？」で解決策を尋ねる。私の意見に従い結果が上手くいかなかった時は、「私のせいじゃない。それはトモキが言ったのよ」。上手くいったときは自分の手柄。ボジョンの中の狭い場所から眺めた同僚達という点で Sampling bias は否めませんが、フラ人とはこんな感じです。慣れるとそのテキトーな感じがたまらなく魅力的です。もちろんベルゲッティー先生はそうではありません、わがままですが。

さて、私はパリ市中央部のセーヌ川右岸のレアール駅のすぐ横、1区モントガイユ通り沿いにアパートを借りて単身生活を送っています。研修医がいうには、典型的なパリ中流下町かつ風俗系の香りが少々だそうです。中の中から上ぐらいの人々が住むようです。確かにこの通りの商店街はなかなか素敵で市も週2回たちますし、スーパーもありますので生きていくには困りません。何を食べていたのか？といわれればフランスパン(1本約150円)を食べていると明言できます。毎日こればかり食べています。典型的には、朝は半分のバゲットとコーヒー、昼は遅めに寮のごはん、夜はバゲット半分と赤ワインとチーズとなります。フランスを去る日にもバゲット食べていたのでよっぽど好きなようです。ご飯を食べたいという思いは特にありませんが、持参したサトウのごはん+生卵+塩コンブを時に日本食？として食べることはほんとうにささやかな楽しみです。物価高ゆえに貧しい食生活というのが正直なところなのですが、そのおかげで努力することなくみるみるやつれダブついた背脂も消失していきました。ここでパン屋の列に並び、犬の糞を踏み、スーパーのレジで小銭を間違い舌打ちされ、勇気を出して床屋に行き珍妙に成り果て、カフェの手書きメニューが読めず不本意なものを食べ、安酒に酔いつぶれながら妄想に耽るのも私の日常です。フラ語はわからず努力もしておりませんが、この国での生活に慣れました。日々何かを見つけたり、気づいたり、新鮮で心地よい日々を過ごしています。この貴重な人生経験を基により成熟したいと願い、残りの日々をどうデザインするかが現在の課題です。

... *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...* *...*

その後約半年が経過しました。実際に病院で何していたの？と問われれば、手術助手以外に、器械出し、外まわり(ビデオ係、術中写真班、US操作係)、ベルゲッティー先生の学会資料作成などであり、1外の医員時代と同じことをやるわけです。これらの業務はボジョン外科医にとっては雑務であり誰もやろうとはしないため外人研修生に回ってくる仕事です。外人研修生同士はこのよう

な仕事を共有しお互い助け合うことが多いのと、当時の劣悪な外人部屋に住むもの同士ということで打ち解けやすくなります。特にイタリア人は気さくかつ場の空気が読めるという点で非常に日本人に合います。好きです。こんなところで日独伊の3国連合を結んだ歴史を体感できます。この外人たちと朝から最低1時間はじっくり小さなエスプレッソを飲みマルボロを吸っては床に吸殻を投げつけ、くだらない雑談を繰り返していました。そこにフラ人研修医が混じり輪になってまたつまらない話をする。ふと横のテーブルでは麻酔科医達、肝内科医達、消化管外科医達も同様のことをしています。毎日毎日顔を合わせ同じ部署で仕事をしているにもかかわらず毎朝雑談はたっぷり、このカフェ習慣に欧州を強く感じます。雑談はここだけにとどまらず昼食時も繰り広げられ、ほんとうに困ったものです。基本的に自分がしゃべりたいだけで、他人の話はあまり聞いていないし、効率や業務改善や勤務態度という単語はボジョンには存在しません(たぶん)。

外人たちによく聞かれたことを外科領域で挙げると、1)名大・二村教授、東大・幕内教授、京大・田中教授、2)外科研修システム(いくつ手術をしたか)、3)リンパ節郭清手技、4)肝解剖、5)外科医の給料とQOLなどです。日本でもあまり変わりませんね。一般領域では、1)日本におけるキリスト信仰、2)仏教、3)日本における神とは、4)漢字文化圏のお国柄の違い、5)日本の移民と華僑の違い、6)日本は北朝鮮とどうつきあっていくのか、などガチンコの内容で閉口します。幸い私は6年に及ぶ浄土真宗高田派の教育をうけているため、テキトーな宗教観を述べたてる自信があり日本を誤解させてやりました。なお、こういう会話は仏語=英語>伊語で行われ、私の唯一の言語訓練の場です。

困った事に二村先生が私のことを過分に宣伝したためでしょうか、「手術をやれ」といわれます。思いついた時に突然言われて困ります。外人研修生としては破格の扱いかもしれませんが、「私たちにはそんなチャンスはないのに、なんでこいつにやらせるんだ!」とばかりの研修医たちのがった目線が身を貫きます。和をもって尊しとなす日本人にはとてもつらいものがあります。純和風の「謙譲の美德」を演出し光速リジェクトしていましたが、この美しい精神は欧州人には通用しません。結局「やれー(怒)」と皆から責められ、ベルゲッティー先生の陰武者肝切、肝切後の胆道再建、移植の再建などをやってしまいました。慣れない道具、言葉の壁、そしてフラ人研修医を前立ちにしたった2人で、二村道場の看板を背中にしょって、という過酷?な環境での手術が上手くいくはずもなく、肝切は出血し進まず、胆道再建はもれるありさま。世界共通の濃厚な香りを部屋中に発散させドレーン穴から膿が流れ高熱にうなされていようとも放置される患者達、ここまで放置できる外科医の根性はある意味すごいものです。私はアパートから陰ながら祈祷することで罪悪感から逃れようとするしかありません。日々「お願いだから、手術しろと言わないでー」とネガティブな念力を手術室に放射しています。外国での手術はどこでもこんな感じなのでしょうか?誰か教えて下さい。

ある胆道系の手術で切除終了時に「じゃあ胆道造影で確認してから閉腹しといて。ウバター代わりに入って。」と教授に言われ、研修医(女性)が「私がやる。あなたは外で待ってて。」といわれました。イメージを使用しながらの胆管造影をえんえんと繰り返しているようで手術室の外で待

っていました。何が楽しいのか、肥満体の老婆の看護師が歌を唄いながら踊っています。その醜い姿に不愉快になりローキックを打ちたくなったことをその時の感情と彼女の加齢臭と共に今でも鮮明に思い出されます。結局1時間後に「トモ入って！これどう思う？」「右後枝が左枝に合流する変異で、OKだ。」「そんなことはわかってたわ。」「じゃあ、なぜ聞く？なぜ1時間？」「教えてくださいって言い直せ」……終了後誰もいない手術室の更衣室の窓から眺める夕日は赤く日本と同じであり、欧州のパリ郊外のとある病院で何してるんだろという寂寥感を初めて感じた瞬間です。

ベルグッティ先生は世界的な肝外科医なため、国内海外を問わず出張が多く忙しそうでした。そんな中でも肝切除を精力的にこなし、技術的なことから考え方そして外科医の心構えまで幅広く指導していただけることは幸せです。「いいかうバター、外科医は強くなっちゃいかん。一つはフィジカルの強さだ。ワシはジョギングと水泳は欠かさず。術中疲れちゃダメだからな。二つ目は判断の強さだ。術中判断の素早さと適切さ、これは毎日の勉強だ。論文読めよ。三つ目は根性だ。諦めない心。これは日々の業務をみっちりやることで養成する。(江畑意識)」「サッカーでいう肉体、戦略、精神の強さと同等の内容です。プロとしては当たり前のことなのでしょうが、なぜか感動を覚えました。「お師匠さま」と思えるようになった瞬間です。肝切除を見学するのは正直単調です、特に日本の色眼鏡をはずしていい所を見つけるには忍耐と時間を要します。最初はなんと普通の手術であることかと若干の失望を感じることもありましたが、3ヶ月を経てはじめてボジョン病院で行われる手術の詳細が理解できるようになりました。とにかく見続けることが重要です。欧州と日本の差異は意識すればするほどサマツな点にまで及び、消化管吻合・結紮法・閉腹法・ドレーン固定法・小道具・糸の選択にも悩みました。多彩な小技が随所に認められ、なぜそうするのかを尋ね、その内容に関連することやフランスの肝胆膵外科論文をアパートで勉強するという日々を繰り返しました。世界各国から来る外人たちとの討論も世界の外科手技を理解するのに役立ちました。私の肝胆膵外科での未熟な部分を補強するための勉強と実地研修で日々追われていました。一方では欧州各国の観光、家族や仕事仲間がパリに来た際に一緒に遊ぶということも楽しみであり、なかなか忙しい日々です。

こんな日々を過ごしていましたが、7月には杉浦禎一先生がおられるベルリンのノイハウス教授の所に、11月には外人仲間の紹介でパリ市南方のポールブルース病院に手術見学に赴きました。同門や友人のツテで世界が広がるかけがえのない経験です。12月頃になるとボジョンでの研修に少し飽きを感じるようになり、二村先生にお願いして2007年1月は東京女子医大消化器病センター外科を見学させていただきました。以前からあこがれていた教室です。ここでは極めて厳格な指導が行われており、昭和の香りをムンムンと発散しステキな空気です。若手外科医は早朝から深夜まで身を粉にして働いており、血管造影やらEUSやらERCPなどの検査も精力的に施行しています。私は肝グループに所属し毎朝7時半の回診から週8本前後の肝切や、膵グループの週2本のPDに参加させていただき、その手技を勉強させていただきました。他にも胆道班の手術や先代の高崎教授の手術ビデオを見せていただきました。そんな中、山本教授から直接手取り足

ボジョン病院肝胆膵外科 便り

6

江畑智希(平成2年卒)

取りグリスン一括法を教わったことは大きな経験でした。皆さんに気を遣わせているのが痛いほどわかります。お昼に大盛りのカツ丼または天丼を1月間ごちそうになったこともたいへん感謝しています。お金ほんとは支払わなければいけなかったのではないかと今でも悩んでいます。

2007年2月から再び腫瘍外科に勤務しています。現在私が行っている手術にはボジョンから東京女子医大での経験が色濃く反映されています。その意味ではこの研修は肝胆膵外科医として極めて有意義でした。フランス最後の方では初対面の女性にあいさつとしてホッペを合わせチュッチュする(ビズ)ことをやってのけてしまうほどに変容した自分に驚きです。このような機会を与えてくださった二村前教授、直接に迷惑をかけた榎野教授はじめ腫瘍外科の先生方には心より感謝しております。そしてベルグッティエ先生がお別れの際に名古屋の方々にぜひこれを伝えてくれと頼まれました。「仏語ができなくても全く大丈夫です。名古屋のみなさん、ぜひボジョンにおいて下さい。きっと何かを掴めますから。」

本内容は同心の友 2006 年、2007 年号に掲載された内容を加筆修正したものである。